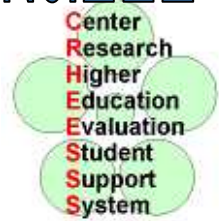


週刊センターニュース No.222



第222号(2008年8月25日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

第195回共同学習会のご案内

日時: 9月1日(月)16時~17時半

会場: 角間キャンパス総合教育1号館2階大会議室

報告者: 渡辺達雄(大学教育開発・支援センター)および授業担当者

テーマ: 「大学・学問論」- 人間社会学域共通科目の検討(第2回目)

趣旨: 本年度後期に開講される人間社会学域共通科目「大学・学問論」について、前回の議論も踏まえつつ、授業担当者を中心に、人文社会学域の設置の目的・理念および授業目標にもとづき、教材や授業方法等について具体的な検討を行う。授業担当者に限らず、大学論・学問論に関心をお持ちの教職員・院生・学生の自由な参加と意見交換を希望する。

PCカンファレンス2008(8/6~8/8、慶応義塾大SFC)参加レポート~その3~

220号、221号に続き「PCカンファレンス特集」として、記事を掲載いたします。

シンポジウム2「構成主義による情報教育」

シンポジウム2ではピアジェの提唱した教育における構成主義を足がかりに、情報教育における実践の紹介と議論が行われた。構成主義に対する考え方である教授主義は、子供は知識を注ぎ込む容れ物と考え、そこに知識を入れていくという「知識の転移」として教育を行っていく。それに対し、構成主義は子供は知識のコンストラクターとしてとらえ、積極的な建設者である子供に対していかに主体的に「意味を作り出していくプロセス」とらせるかにポイントを当てている。コミュニケーションを含め作り方を学ぶのではなく、意味を作り出す情報教育の取り組みが必要とのことであった。

実際の授業では構成主義に基づく授業は多様な学びを認めるためにプラン先行型(Plan-Do-See)にはまりにくく、授業の確率にも時間がかかる。教師のスキルが必要になるが、ベテランの教師のノウハウを一般化することが重要であるという点から、やはり情報の共有と、参照しやすいシステムというのは重要であるとのことであった。ポータル利用に関しても、何ができるか以上に、どう使うかが最重要項目であることが理解できる。

このシンポジウムで紹介されたのは、Logo、ExcelVBA、Squeakなどを使用した実践の紹介も行われた。ここで注目すべき内容は、ICT関連の授業において文系と理系で全く違う授業アプローチをしなければならないということである。理系であれば、プログラムなどの作業も含めて使えなければならないと感じており、多少難しくても課題に取り組んでいく。しかし文系学生にはそれだけでは駄目で、学ぶ意味がわからなければ授業もやれない。未経験者にとってはprogramしたことが重要であるため、そのために用途のわかる題材で身の回りにあるタスクを解決するプログラムをすることになる。実際に文系であってもこういった準備をしておけば、基礎の部分だけでなく、プログラミングの授業であっても積極的な作業が行われているようだ。情報処理関連の授業を考える際には是非念頭に置いておきたい内容であった。

シンポジウム4「情報技術と日本語」

このシンポジウムでは、まず日本語の情報分野での状況を踏まえて、フォント作成に関すること、日本語教育のシステム科、英語教育の簡素化、そして日本語によるプログラミングについて紹介された。

また日本人の情報技術者が不足しているが、その理由が情報技術者の育成の方法目的が的外れ、専門家が育たないことをあげていた。アメリカに比べて先端分野の情報技術者が5分の1しかおらず、教育を受けてもほとんどが短大高卒程度のレベルでしかない。そこで日本人の情報技術者を増やすために日本語によるプログラミングの可能性を探る内容であった。われわれが身の回りのことをどう認識しどう構成するか整理する作業がプログラムであるが、文字化けなどしないためにフォルダの名前も英語を使うし、プログラムそのものが英語にあわせた仕様になっていた。コンピュータの世界で整理をするのに日本語が必要なのに、日本人は器用すぎるから、日本語が使えなくても輸入品に身を合わせ、コンピュータ様につきあってきたという表現を使い、日常が文化が日本語の上にあるのなら日本語にあわせた日本語のプログラミングを開発する必要があるということである。

プログラミングの語順が日本語の語順に変わったが、情報処理に適しているといえる日本語の特性を生かした日本語でプログラムを書く試みは、昨今のコンピュータの高性能化が後押ししてくれるだろう。

イブニングトーク

「大学生協パソコン講座スタッフ交流会」に参加した。会は大学生のPCサポート講座を行っているスタッフの交流と、生協職員およびその他の参加者の情報交換グループに分かれた。

学生間での話し合いは情報交換がメインであったが、職員その他のグループでは、パソコン講座スタッフのような有志による学生スタッフ組織の継続および活性化に関する話題で盛り上がった。どのような形で、どの程度、どのタイミングで、職員や教員が学生に梃子入れをするかを、現在の活動に対するアプローチを参考に話をした。これは研究室運営や、学生のグループ活動に対しても応用が利くことであるが、やはり学生にある程度の梃子入れをしなければ一定のレベルでの成果は上がらず、一般的に使える指針作りが必要という議論となった。

分科会

A. 教育学習支援

この分科会ではFD・ICT教育推進室の末本が報告を行った。その他の発表と併せて、やはり金沢大学におけるLMSおよびポータルサイトの利用は、全国的に見ても組織的に進められている少ない例であった。その他の場合、個人の研究室単位での使用となり、システム管理者への負担が大きく、組織的な普及にまでは考えが及んでいないようである。多かれ少なかれどの大学、高専の先生方も有用であり、使えば雑務の一部が楽になるのは理解しているが、実際に導入するためには人的サポートが必要であるという状況であった。本学ではFD・ICT教育推進室の活動としてこの人的サポートを行う体制が整えられており、報告にあった事例は大いに役に立ちそうである。

B. 教育方法論

教育方法論の分科会では、東京大学の妹尾堅一郎氏による「知と授業法の関係の多様化へ」という内容から始まり、大学生協、フィールドワーク、PC教室の座席配置、という内容であった。知の種類と授業法の多様性について整理・考察する妹尾氏の報告は、授業方法に関する悩みに対し獲得・習得を目指す知識の整理が改善を進めやすくする可能性があることを述べている。目的に対し授業の方法を変えるのは当然のことながら、選択の基準を明確にすることでより効果的な方法を選びやすくする可能性を示唆していた。

C. 情報教育3

本学FD・ICT教育推進室の瀬川が報告を行った。その他の情報教育の実践の報告も踏まえ、全学生に情報教育の基礎科目を実施できていることと、更に発展系の情報教育の科目を用意できているのは本学の強みであることがわかった。情報系、理系の学生に関しては最低限の授業はできるが、文系やその他の学生に関しては情報科目への積極性も少なく、また高校での情報教育で生まれたスキルの差を埋めることが第一の課題である。その中で北陸学院大学の就職先に調査を行った最低限のPCスキルの件は、今後学生に就職をより意識させる情報教育を行う上で大変参考になる内容であった。マナーや慣れていることなど、単純な技術よりも、PCにどれだけ触れ、どれだけ公とのやりとりをしているかが重要であることがわかった。

(文責：大学教育開発・支援センター - 鎌田 康裕)